

つなぎたい

エスティージーズ SDGs新企画 をスタート

- ・各地のメンバーのヒューマンストーリー
 - ・識者インタビュー、17の目標の解説
 - ・仏法の視点からの課題の考察など
- 多彩な記事を掲載します!

— 根本さんは、日本のテレビ局でアナウンサーなびに報道記者を経験された後、1996年に国連職員に転身。世界中の難民支援に奔走され、2013年から現職に就かれています。

私は、神戸で生まれました。港町というところもあり、父の仕事の関係で海外の人がよく家に遊びに来ていました。そのためか、子どもの頃から多様な人種に接し、美しい、あるいは、好奇心を刺激してくれるものとして強い興味がありました。

9歳の時、家族でドイツに4年間住むことになり、それまでとは全く違う言語や文化、環境に放り出されました。1970年代のことですから、肌の色の違いがくさくさ露骨な差別もあった……。

新春インタビュー

新企画の第1回として、日本国内でSDGsの普及に努めてきた、国連広報センター所長の根本がおるさんに、SDGsの意義や今後の課題についてインタビューしました。(取材=サダブラティマヤ、木崎哲郎)

2030年へ—— 自分の足元から行動を

8年後の2030年—— 皆さんは、どんな未来を思い描いていますか? 「SDGs(持続可能な開発目標)は、2015年に国連で採択された国際目標です。2030年の達成を目指し、貧困や飢餓の撲滅、ジェンダー平等、気候変動の対策など、17の目標と169のターゲットを掲げています。SDGsは、国連に加盟する全193カ国が賛同した「約束」であり、この美しい地球で人と自然

が存続していくための「条件」でもあります。聖教新聞は国連の「SDGメディア・コンパクト」に加盟しており、本年からSDGsをテーマにした新企画をスタートします。各地のメンバーのヒューマンストーリーや識者インタビュー、17の目標の解説、さらには仏法の視点からの



国連広報センター 所長 根本かおるさん

profile

ねもと・かおる 国連広報センター所長。東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、米国防立国際関係論修士号を取得。1986年から2011年まで、UNHCR職員として、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。フリージャーナリストを経て13年より現職。著書に『難民鎖国ニッポンのゆくえ』(ポプラ新書)他。

なかなか馴染めない母が、かわいそうでした。差別のレッグでまごまごしていると、侮蔑的な言葉を浴びせられることもあり、抗議するのはいままで私の役目。社会の少数者へのほまざしがり育まれたのも、この頃からでしょう。か、悔しい、という感情、そして、「自分が頑張らなきゃ」という意識が、子どもながらに芽生えました。こうして体験があれば、今の私はなりたいと思います。

ネパールでの経験

— 難民支援には、どのような経緯で携わったのですか。

記者として働いていた90年代、専門性を磨きたいの思いから、会社を休職し、アメリカの大学院に留学しました。1年目と2年目の間の夏休みを利用し、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)でインターンシップをさせてもらったんです。

受け入れ先は、ネパール南部のタライ平原にあるプーターン難民キャンプ。それから十数年がたち、今度は国連職員として、現地事務所所長という立場で戻ったことになりました。

特に忘れられないのは、難民の子どもたちとの関わりです。難民キャンプにも学校があります。子どもたちにとって、教育は民族の誇りを守るとともに、不条理な現実から脱出して未来を開くための大事な手段なんです。でも、女の子たちは、生理になると学校に通えなくなりました。下着が汚れても替えがなかったからです。

事務所の元々の援助計画には、女の子たちに下着を配ることは入っていませんでした。そこで、個人のプロジェクトとして、友人にお願いで寄付を

用し、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)でインターンシップをさせてもらったんです。

受け入れ先は、ネパール南部のタライ平原にあるプーターン難民キャンプ。それから十数年がたち、今度は国連職員として、現地事務所所長という立場で戻ったことになりました。

特に忘れられないのは、難民の子どもたちとの関わりです。難民キャンプにも学校があります。子どもたちにとって、教育は民族の誇りを守るとともに、不条理な現実から脱出して未来を開くための大事な手段なんです。でも、女の子たちは、生理になると学校に通えなくなりました。下着が汚れても替えがなかったからです。

事務所の元々の援助計画には、女の子たちに下着を配ることは入っていませんでした。そこで、個人のプロジェクトとして、友人にお願いで寄付を

課題の考察など、多彩な記事掲載予定です。誰も置き去りにしない、持続可能な社会への「足元」からの行動を、読者の皆さんと共に考えたいと思います。

— 今のお話は、SDGsの根底にある「誰も置き去りにしない」という精神そのものだと感じます。SDGsができた背景を教えてください。

SDGsができた背景には、このままでは地球の豊かさを将来につないでいけない、という危機感がありました。SDGsには、二つの大きな潮流があります。一つ目は飢餓や貧困など、発展途上国の開発課題。二つ目は、気候変動をはじめとする地球環境の課題です。これまでは、これらの問題に別々に対処してきたのですが、つなげて考えなければ、いつまでたっても解決できないと認識されるようになったんです。

SDGs以前に掲げられてきた世界目標の理論というは、国が豊かになれば、溢れ出るように強い立場の人々も豊かになる、というものでした。しかし近年の経験から、これは真実ではないことが分りました。豊かな人はどんどん豊かになり、取り残されたからは、ますます取り残されていってしまいます。

こうした教訓を踏まえて、弱い立場にある人の存在を踏まえて、念頭に置いて、世界目標を設定することにしました。女性、若者、子ども、先住民、障害がある、高齢者など、あらゆるグループの人たちを巻き込んで、意見を吸い上げました。また、1000万人を超える世界中の人たちにアンケート調査を行い、それぞれが考える重要課題を集めました。

その集大成として採択されたのが、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」という文書です。この大きな文書の中で、17の目標として示されているのがSDGsです。

